

水沢周

青木周蔵

明治外交の創造 ■ 壮年篇



水沢周

育木周蔵

治外交の創造 ■ 壮年篇

日本エディタースクール
出版部

水 沢 周 (みずさわ・しゅう)

1930年東京生れ、1954年早稲田大学文学部卒。NHK、国際文化振興会、日本読書新聞などを経て、現在、フリー編集者。シェル石油、日本鋼管、IBM等のPR誌の編集・制作にあたる。主な著書、『石炭——昨日・今日・明日』(築地書館)、『あえてわれらドン・キホーテ』(共著、築地書館)、『高度成長と日本人③列島の営みと風景』(共著、日本エディタースクール出版部)、『青木周蔵 青年篇』(日本エディタースクール出版部)ほか。

青木周蔵 明治外交の創造 ■ 壮年篇

一九八九年五月二十五日 第一刷発行

著 者 水 沢 周

発行者 吉 田 公 彦

発行所 日本エディタースクール出版部

〒一六二 東京都新宿区市ケ谷田町一―六

電話(〇三三)二六七―四九五二

FAX(〇三三)二六七―四九五四

本文印刷・三秀舎／付物印刷・精興社／複製本

© 水沢 周 1989

ISBN 4-88888-151-0

青木周蔵
明治外交の創造
■ 壮年篇

目
次

第一章	白女房	1
第二章	“世界男”の自負	43
第三章	伊藤VS大隈	77
第四章	憲法調査	156
第五章	大発見	194
第六章	会議は踊る	238
第七章	フォン・アオキの夢	287

目 次

青木周蔵年譜	517					
第二部あとがき	507					
終章 残 光	491					
第十一章 自 爆	464					
第十章 光と翳	418					
第九章 大津事件	354					
第八章 火中の栗	317					

【青年篇 目次】

- 序の章 光る海
- 第一章 ほね、ほね、ペーデンデレン
- 第二章 航海遠略策始末
- 第三章 攘夷断行と周蔵
- 第四章 四境戦争と「弁医」
- 第五章 「弁医」長崎へ
- 第六章 吾心結ぶ……
- 第七章 ハッスル周蔵
- 第八章 岩倉使節団、条約改正をもくろむ
- 第九章 木戸と青木と憲法原案第一号
- 第十章 明治六年政変の嵐の中で
- 第一部あとがき

装丁 田村義也

第一章 白女房

ここに不思議な写真がある。手札型鶏卵紙に印画され、「有名高官概覧表」(「一億人の昭和史」^⑫昭和の原点明治^⑬『毎日新聞社刊所収』)と名付けられた、お土産用のいわばプロマイドである。ちなみに鶏卵紙とは、幕末から明治半ばころまで使われた印画紙で、卵白のゼラチンを感光剤の溶剤として用いたものだという。

そのプロマイドには、四十人のいわゆる高官たちの肖像写真が、楕円の枠にひとりひとり収まって雁首を並べている。最上段は右から木戸、岩倉、三條、大久保、そして、板垣。二段目は、副島、勝、江藤、大隈、山県。三段目は伊藤、黒田、後藤、有栖川熾仁(たるひと)、そして田中不二麿(文部官僚)。田中が入っているのがやや不つり合いではあるが、ここまでの人選を見れば、まあ、初期太政官政府のトップ・クラスのライン・アップと見て取れよう。しかし、六段目に、わが青木周蔵の顔を見出だすに至ってこのアルバムは、にわかには不思議な色合を帯びてくるのだ。この写真のネームはすべて「公」と

いう敬称がついており、青木も「青木周蔵公」と奉られているのだが、青木がそう称せられるような立場を得たのはいつだったろう。明治七年春の初帰朝の時はまだ代理公使に過ぎなかった。そしてその年九月によくやく全権公使に任命された。全権公使と言えば国家を代表する使節なのだから、まぎれもなく高官と言つていいであろう。しかし、ここに並んでいる江藤新平は、その時すでに敗れた反乱者として、惨刑にあつた後なのである。ここに「江藤新平公」が登場しているのは、いかにも不思議と言わなければならぬ。また、江藤が出て来るのに人気抜群のはずの西郷隆盛は出て来ないのはなぜだろう。もつとも西郷は写真嫌いで、その写真は存在しないと言われている。キヨソネが描いた有名な肖像画があるが、キヨソネの来日は明治八年であるから、肖像画の成立は九年以後と見るべきであろう（西郷の死後に描かれたともいう）。錦絵にはすでに西郷を扱つたものもあつたはずだと思つて、いずれにせよ西郷がここに現れないのは、プロマイドの作者があくまで写真を使うことにこだわつたからだと単純に解釈しておく。

それにしても、これがいつ発行されたのかという謎は解きにくい。青木と並んでいるのは、山口尚芳、吉田清成、鮫島尚信、上野景範で、山口を除けば、皆外交畑、そしておおむね明治七年に全権公使に任じられたグループである。その限りにおいては、人選に一貫性が見える。では、これを七年頃の出版と見ていいだろうか。いや、さらに下段に目を移すと、不思議さがもう一つ加わつて来るのである。たとえば渡辺昇が登場している。この人は志士として古い閲歴を持つているが、いささか粗暴の振舞いが多かったせいか比較的出世が遅く、高官と言ふべき地位に昇つたのは明治十年（大阪府知事）であつた。さ

らに、荒井郁之助の顔が見えている。荒井は、榎本軍に参加した幕府の海軍軍人であり、宮古湾の官軍艦隊奇襲作戦を指揮した快男子である。その後、他の榎本軍幹部と同様、黒田清隆に拾われて北海道開拓使に出仕し、開拓使仮学校、後の札幌農学校の初代校長となつてしばらくは北海道で過ごしていた。この人物も、辛うじて中央政府の高官と呼ばれるにふさわしい職につくのは、やっと明治十二年のことである。内務省測量局長兼、初の中央氣象台長というのがその官職であつた。また、吉原重俊の顔も見える。吉原は後の日銀総裁であるが、明治七年では大蔵省租税権頭、明治九年では大蔵大丞と、せいぜい課長か局次長クラス、十三年によく大蔵少輔で、筆頭局長といつたところである。

それらのことから考えると、このプロマイドの発行年は、十二ないし十三年まで下げなければなるまい。しかし、木戸の死は明治十年の五月、そして大久保の暗殺は十一年の五月だ。十二年ないし十三年の刊行物に、江藤と木戸・大久保、そして新鋭の官僚たちがこのように肩を並べて扱われているというのは、なんとも不思議ではないか……。たかが土産ものにそれほど目くじら立てる必要はないのかも知れないが、そもそもこの発行者はだれなのか、また、どういう意図で発行したのかということなども、少し気になって来るところである。多分これは、江藤の断罪については賛成していない立場の人間の仕事なのであろう。また、明治十二、三年頃では、名にし負う内務省の目も、こんな片々たる出版物まではまだ及んでいなかったということを物語っているのかも知れない。ともあれ、明治十年代というのは、まだまだ国の基礎が流砂の上に立っているように覚束なく、ひよわだったのである。さらに言えば、このささやかな出版物は、明治初期という時代の複雑さと不思議さを、如実に物語っているもののように

私には思えるのである。

それはそれとして、こういうところに青木が登場するというのは、やはりそれだけ彼が若手官僚のホープと見られていたことを示すのであろう。少なくとも外交の第一線に立つべき資格を持った人間として、一般から評価されはじめていたことは、間違いないと思われる。この写真で見る青木は、後に彼のトレードマークとなったあご鬚はたくわえておらず、肉付きもややよくて当然のことだが若々しい。しかし、けいけいたる眼光は、まさに青木周蔵そのものである。

青木周蔵の風貌が、多分初めて世上一般に示されたと思われるプロマイドを見て、思わず余計なことから書き始めてしまった。

§

明治十二年八月二十四日、青木周蔵は、ドイツ人の新妻エリザベトをともなつて再び帰朝した。外務省条約改正取調御用掛に就任するためである。前任御用掛としてはアメリカ帰りの吉田清成などいゝるはずであつた。青木が七年の秋、駐ドイツ特命全権公使として赴任してから五年の歳月を閲けみしている。その間、日本では西南戦争という大きな内乱があり、木戸の死があり、暗殺による大久保利通の死があつた。維新の三巨星は揃つてもうこの世にない。また、この間、寺島宗則外相による条約改正の試みとその失敗ということもあつた。内外ともに多端きわまる日々だったのである。青木としても感慨にたえないものがあつたであらう。

新妻はプロシヤの貴族、フォン・ラーデ家の娘であつた。今、彼女は船の手すりから身を乗り出すようにして、初めて見る夫の国の港、横浜の風景を、濃い眉毛の下の大きな瞳に興味深そうに映していた。彼女は妊娠七か月の身重である。しかし、いかにも骨太のドイツ女性らしく、炎熱の中東、東南アジアの船旅を元気に乗り切つて来た。日本も、まだ夏の終わりの日差しが強く波頭がキラキラ輝いて眩しいようだったが、渡つてくる風は、爽やかな秋の気配をもう感じさせ、それだけでも夫の国の第一印象は悪くはなかつたのである。

本船からはしけに乗り移る時、そして、はしけから波止場に揚がる時、青木はさりげなくエリザベートに手を貸した。いつもはそんなことをしない男であつた。

「ドイツにはアメリカのような妙なレディ・ファーストの習慣がなくてありがたい」
と、馬車の乗降などもさつさと先に立つて行ってしまうのが常であつた。「これでもやはり、精いっぱい私の体のことに気をつかつてくれるのだから……」と、エリザベートは夫の謹直そのものといった表情を横目に眺めやつて、ほほえましく思った。

横浜の様子は、前回青木が帰朝した時と大差はない。ただ、西洋風の公園などはぐつと落ち着いた感じになつていたし、競馬場なども整備されていた。青木は停車場で汽車に乗り込む時も妻に手を貸したが、その汽車のあまりの小ささに、ちよつと恥ずかしそうな顔をしてみせた。

青木たちの乗つた上等客車の客たちの服装は整つていたが、中等、下等の客室の人々の服装は、まことに種々雑多であつた。エリザベートが、とくに興味を持ったのは、紺色の、体にぴつたりあつた細い

ズボンのようなものをはき、これも紺色のエプロンのようなものを着てその上に袖の広い上着を羽織った威勢のいい男たちである。その上着の背中には赤や白で、なにやら大胆なデザインの染め抜きがされしており、男達は一様に小形のトランクほどの容量の細長い木箱を肩に担いでいる。そして、だれもが調子のいい快活な口調でしゃべりながら下等(三等)客車に入って行った。

「あれは、なんとという服？　そしてどういう職業の人たちなんですか？」

「あれは法被、腹掛けというものだ。職人達のいわばユニフォームと言ってもいい。身軽に走り回ったりするのに便利なのだ。彼等はきつと大工だよ……」

そして青木はまるでひとりごつのようにドイツ語でつぶやく。

「日本は今、なにかも普請中なのだから……。それにしてもあの服装は、あまりていさいのいいものではないな」

「あら、そんなことはありませんよ。なかなかシックだし、それにいかにも機能的ではありません？　おなかのところに大きなポケットがついているのね。あれはいかにも便利そうだわ。ドイツの職工服にも似たようなものがありますけれど、それよりずっとスマートですよ」

エリザベートが、もうひとつ好奇の目を見張ったのは日本人のたばこの吸いかたであつた。近くの席にいた富裕な商人らしい男が吸い出したのである。彼は帯にはさんであつた細長い袋状のものを抜き取り、ふところからもポケットブックくらいの大きさの革袋を出した。その長細い袋には見事な金属細工のほつそりしたパイプが入っており、もう一つの袋はたばこのパウチだつた。男は窓外の景色に目をや

りながら、パイプの頭をパウチに突っ込み、片手だけで、器用に少量のたばこをパイプにつめて口にくわえると、いつのまにかふところから出していたマッチをすって火をつけた。二、三口吸うと、もう終わり、彼は逆さにしたパイプを掌に強く打ち付けるようにして灰を落とし、たちまちパイプもパウチも元の場所に収まってしまった。その間、男は景色からまったく目を離さなかったのである。なにやら手品を見ているようであった。かすかに青い煙りと薫りがただよっていかなかったら、今見たことは幻だと思いかも知れないほど瞬時のことであつた。そしてしばらくするとまたその商人は、その一連の素早い動作を繰り返して見せてくれた。エリザベートは目を皿のようにしてそれを見詰め、やがて溜め息をついて言つた。

「たばこは、とてもとても細く刻んであるのですね。まるで糸のように。パイプもとても美術的だわ。そして、ほんの少ししか吸わないんですねえ。たいへん健康的なのね」

こう彼女が感想を述べると、青木は笑つて答えた。

「日本人にもヘビースモーカーはいるさ。職人たちの吸いかたなどを見ると、君はもつと面白がるだろう。彼等の中には、吸い殻を掌にそのまま受けて、その火を転がしながら器用に吸い継いでいく者がいる。そんな連中はけっこうたくさん吸うよ」

商人の喫煙を何回か楽しんで見物しているうちに汽車は新橋についてしまった。

東京に落ち着いた青木は、しばらくのちに京都の木戸末亡人を訪ね、孝允の位牌に拝礼した。お松末亡人は、いかにも京都の女性らしくこぢんまりとつましく仏壇をしつらえ、香華を絶やしていない。

周蔵もさすがに殊勝らしく手を合わせ、長いこと目をつぶって木戸の冥福を祈った。木戸にはまったくよく面倒をかけた、そして、その恩に報いることがほとんどなかった……と、改めて思うのである。

そう、周蔵はまったくよく面倒を木戸にかけた。どこまで甘えられるか、試してみたいようであり、あつた。あんなに我慢強く面倒を見続けてくれたのは、どういうことだったのだらう……。考えてみれば、エリザベートと無事結婚できたのも、半ば以上は木戸のおかげなのであつた。

青木が、『青木家の家付き娘』テルとの離婚話の後始末もそこそこに、ドイツに発つてしまつてからしばらく、木戸と青木の間の書簡のテーマの大部分は、慰謝料の交渉であつた。しかも、このころすでに青木とエリザベートとの間には恋愛らしいものはじまつていたようである。もつとも、青木自身がこのことを語っている史料はない。しかし、木戸の書簡を少し注意深く読むと、そのへんのいきさつが読取れるように思われる。少し時間をさかのぼって見よう。明治八年五月三日付の木戸から青木周蔵への手紙はこう語る。

「萩の方からしばしば責問にあずかり申し候。そのわけは御旧温(前夫人)どふか(どうにか)再嫁の都合もでき候かのよし。ついでに御付与の金高うけたまわりたくとの事にござ候。しばしばの催促につき出過ぎがましくは候えども五六百両位は大方御付与にもあいなるべきかと申し越し置き候——中略——兄にもかつがつ(せいせい)御熟(じゅく)按下(おくだ)されたく、もうひ手も必ず土産を目的にこれあるべく、彼(テル)のこゝこの時期を失しもらひ手もこれなくますます老境に至られて候ては、再嫁などと申すこともむつかしくこれあるべく、自然その節兄の美細君と比翼連理のお楽しみを朝夕指をくわえて羨まれ恨まれ候て

も　なかなか五百両や六百両にかえられ候ことにはこれあるまじく……」

いかにもテルのせつない立場の哀れさが伝わってくる文面である。慎重な木戸は、五、六百両というのは彼女にとって最低の条件であつて、なるべくはそれより増額することを考えてほしい、それより少なくてはいらい手もあるまいと、念を押している。そしてこの件は九月に至つてようやく決着した。慰謝料は千円ということになつたのである。しかし、青木からの送金は直ぐには行なわれなかつたらしく、木戸が二百円ばかり「余儀なき次第につき」立て替えたという手紙も残っている。

青木がエリザベートに心をひかれたのは、上流階級のドイツ婦人を妻とすることが、彼の今後の外交官生活にとってプラスになる面があると考えたこともあろうが、ひとつには井上省三や、井上とともに来独し、青木の勧めで林学を学ぶようになった松野礪などの恋愛に刺激されたこともあつたのではないだろうか。井上が、ラシャ工場の工場長令嬢から好意を寄せられつつあつたことについては、前の章で触れた。それは井上省三にとって、はじめ、やや政略的な恋愛であつたのかも知れないが、ちゃんとした女性に、真摯な愛情を、しかも異郷で寄せられることは、男として嬉しくないはずもない。情にほだされて、その恋愛は急速に本物になつていたのである。もつとも井上も養子の身分であり、この恋愛を故郷の人々に認めさせるのはなかなか骨である。勢い、郷里の先輩である青木に、いろいろ相談を持ちかけた。また、松野も長州美祢郡みねの出身であるから、青木にとってはほとんど同郷人である。美祢郡は厚狭郡の北隣りの内陸部で、後には無煙炭や石灰岩の産地として有名になつたが、本来やや山国めいた地方である。青木が彼に林業の修学を進めたのも、この出身地の事情を考えたからであつたらう。その

松野もドイツ娘と恋愛していた。

日本人と外国人との通婚が許されたのは、明治六年三月十四日の太政官布告によつてであつた。その年の七月には、石川県士族の娘と共立学校お雇いのイギリス人教師フリームという男との結婚届けがあつたと、石井研堂の『明治事物起源』にはある。外国人の妻をめぐつた日本人の例としては、井上省三の事跡をくわしく研究しておられる三木克彦氏が『井上省三とその妻子——ルドルフ・ケーニツヒの手記から』で示された山口県士族、南貞介とイギリス婦人との結婚の例が一番早いように思われる。南は『防長回天史』には数度見えている名前で、慶応元年、山崎小三郎とともに渡英し、兵学を学んだ。山崎はロンドンで病死したが、南は無事に学を終え、慶応年間にいったん帰国している。その後再び渡英し、明治五年九月にイギリスで弁務使に届け出て結婚した。ただし日本政府への届け出は六年五月となつた。余計なことのようにだが、この南という男は、岩倉使節団の旅費を自分の勤めてゐるイギリスの銀行であずかり、運用しようとしたが、その銀行が破綻したため、使節団を立ち往生に追い込みそうになつた人物である。同じく明治五年十月、ドイツの女性が宮崎県士族三浦十郎と結婚するため来日した。この二人の正式な結婚は八年三月にようやく行なわれている。『明治事物起源』には「たで食う虫よ異国からおかみさん」という、川柳ともなるとつかない警句が載つており、作者も作られた時期も不明だが、この頃の一般庶民の感覚を、よく伝えている。

井上も松野も、明治八年秋に帰国した。井上は、ラシヤ製造の技術を一応マスターし、いよいよ日本にその工場を作ろうと意気込んでいた。それも、出来れば政府直属の軍・官用工場として出発したいと